俳諧古集之辨

中

俳諧古集之辨 中

羽陽 遅日菴 辨

續猿蓑集　芭蕉

八九間そらで雨ふる柳かな

見立の句也更に風情の称りなし ○ 此ほくハ桜の雪と空にしられぬとよめる紀貫之の和哥に歟して空天の差別と取はせりともいへりけり

ま此かし土の畠ふる嵐　沾圃

聞こえたる景色にて俗中に雅あり

初荷とる馬子も好みの羽織きて　馬莧

在口めく風情もをかし

月を小さく作くの夕ゆるまひ　里圃

掻けば酒いろ〳〵まやらん振舞の紙の折と得たり

きのふ〳〵日和ふる月の色　沾

時分を知せり

猪背かれく肌寒ちる　蕉

空されて雲と傳ふ晩秋のうきさかん

混沌もふ〳〵八風を吹れさかり　里

対所ありいん　○月下三の二物かんて妨ぎん本歌月の光景と

孫ゝ訪ふ　秋定の　信徒　莧

俳諧ちまさる世情をきるへし

脇指を望て刀うる　旅刀　蕉

人生ふとうまさるん　○虚實の拠に則とゝへし

爆とちまくん　餅力　沾

正月ちうき雑とのうて孫をとゝ〳〵うの主を雑に多仮寄

約束の小ゝ一さけ　夢を集て　莧

十里ちうりの余ふく　生ゝり　里

不部合ちう雑を附ふうう餅情あり　変を死活と味ふへし　仮

ちう意を不快ちうを雑に昂変ちう

笹の葉ふを小路　埋て　ちき　沾

郊外へうとり　伝せり

行夏ちうりを門力出ける　蕉

蒔詞ゝ竹下の三逕をふまえて結句ゝ幽静かきりなく
ゝ又更なり

いけにくゝ浅ハ波たつ蜻蛉哉　里

扇ハ蔦又字られるゝ多葉の枝きくもやゝて移らうき風情
なるゝ

やゝ雪出す京ハ道はれ　莧

居物のとれるとなりて見るねの月くきゝ以為というさハ上七文
字の点釈又ゝ

みるゝ月あくゝ雲のゝてあいて　蕉

名出のあゝゝ所なりてあゝ風色をなりてゝ

見るゝるゝ萩ハ　ゝくゝ口　沾

苗ゝて芽出の初をとゝるゝゝん新緑ゝ月ゝを結へり
のゝて白ゝ月ゝを

夏草ゝまつ落れゝ作ゝ丈　莧

物の詞ゝ無ゝ詞ゝ苗代とゝてかれゝ仕合を
年ゝ浅物あり

伊勢の下向ゝ角ゝゝゝと　里

ゝゝ所なり　○ゝの名を意ゝの物語とゝなり

ゝ持ゝ小草の仲ゝゝゝゝと　沾

女子ゝれとゝてゝハゝくゝゝゝゝゝの詞ゝ苗代
ゝゝ奪ゝて移白所の景ゝゝ変あり

ゝゝゝゝゝと空の晴る　青雲　蕉

所用の変ゝ苦ゝ所ゝ所ゝいえり

禅寺ゝ　一日あゝ毎　砂のゝゝ　里

世塵を忘れて語ゝ心ゝ
○砂のゝゝ語時天を結ひ遠とのゝゝの余情ゝゝゆ

撫ゝ角のゝてゝ　雲　穴　莧

遊ふの一字を換骨して手傳の事とする附なせり

濱出しの牛に俵をとりてぬるなり　蕉

まてぬとみるる素人して秋日ゆきくるる垣根に微中の堪あり

なれぬ姫るちかくす道心　沾

さしとういへる物ともて運送に米を積るるありとそ

月待に傍輩衆のうち揃ひ　覧

武門に表を飾るの意味あるなるし　但附意を引たるに似たれと自他に論なし

籬の菊の名乗さまく　里

ちとうれりし

むれくまて栗も柿もむくの骨　沾

伴僧はしる駕のわき　蕉

いつ彼の樹本と見て妻の寺にまゐるを以てやこれに寺門の出発あることと見えたり

削やうに長刀坂の冬の風　里

走るの用なり　○　坂の名にしたら物を照し出せり

まぶたに星のこぼれかかる　覧

秋月あかくみるを尊て宿の名残を所望し得たり

引立て無理に舞する竹やうさ　蕉

起情なり　○　鎌倉に来る静女か面影あるといへんか愁を始めある娘態のかなしさなり

その川と火入におとし薫　沾

見る人あり艶情知るべし

花ハちるやちらぬ春の色られて　莧

きのやうなる風情相應せり姿のしき附句もいかや

瀬々ちらの月影かゝるゝの水

ちよ似たるといふや

○

雀の宮やおもてにての聲　馬莧

上五曲あり俗味更なし

てり葉の岸のおもしろき月　沾圃

面白きの詰あるとうけ上弦月の形容を一の半より移らんる紅白のちらひあるを

立家を買てしられぬ秋されて　里圃

都会の地乃かたはらなる見ゆ景寂を好む景色を見して句をなさん　○此附二句ならべよく見くし色せ情を移す

嫁川しらるをのぞく甘酒　莧

まてしき蒲を稲なれん越の移を歓せり

手打なる芸嗜みても又六人　沾

早錢のまゝを折せり新用なり

むしろを敷て分ぬ洗足　里

藤屋の新らゆ　○合すして見るいたまかくれ

なしと見える文なら尊して附たり

梅しさハ亭ゞの一歩出見えてならひ　莧

市仕業の法をもつたん師事して行自称とこそあり

[illegible]　沾

自他の変心　○下女や小僕などの業をもて[illegible]風情

よすがさうる業をのてを家もきつらハ一　里

擬手せりのあるん　○まことふる舞の言語とあるべし

[illegible]　方の客　莧

[illegible]和と足て起情と夢せりさハ和云々見るか設とあるかるの義

[illegible]　○起情八換骨の[illegible]の例あり

[illegible]　駒迎　沾

田方といふを京の詞と足て[illegible]

○自作と反対あり[illegible]

風[illegible]の穂付　里

田舎と称して通りし記の静[illegible]きとそり　○助るの一法稲

[illegible]あり[illegible]

[illegible]　莧

[illegible]の[illegible]　沾

[illegible]

[illegible]伊勢の辛酉の[illegible]　里

夫婦を共今足つける風情[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]人のあり[illegible]

[illegible]　一徳　莧

俳[illegible]　沾

[illegible]

[illegible]年の春 纏 里

[illegible]の邪[illegible]や春[illegible]

[illegible]の[illegible]を雪を掃[illegible] 蒐

[illegible]の義[illegible]もて[illegible]日新[illegible]その[illegible]の[illegible]

[illegible]ぬ 合点して 鄙[illegible] 沾

掃[illegible]結[illegible]より快き日の[illegible]

[illegible]の者と中[illegible] 里

[illegible]年[illegible]

三時 敷賀の[illegible]力[illegible] 蒐

今津 [illegible]津の舟同[illegible]生代[illegible]

○[illegible]賀の[illegible]八[illegible]の津[illegible]

[illegible]の[illegible]の生[illegible]て 沾

[illegible]即[illegible]迎[illegible]

[illegible]む 麦[illegible]刈[illegible]て[illegible] 里

在所の[illegible]

[illegible]の指[illegible]を出[illegible] 蒐

刈[illegible]建[illegible]の[illegible]

[illegible]の[illegible]乃[illegible]き 沾

狭[illegible]

[illegible]て[illegible]小[illegible] 里

お[illegible]

卑下して意をよい料理する　蒐

欠落者のうねくしくもうつくしきの方をかりそめる物なる歌

肌もうつくして秋よりなりかわり寄の月　沾

顔ゑ　こうもう　玉　笹の雪　里

月よあふぎさうるなりとうせひやうるる情を結ひて郭月の

雲あり

この金ゑて夏の母ちあと問て　蒐

起情なり　○えしゆうて墓ゑうせ娘のうつせひ

うつうゆ

みうたいて　ゆく　出羽の　兵庭　沾

年ころ流浪しみちう武士ともうつ　○起情なり

又諸ゑ　ゑ又ゑ寄の一伝といりん

恵のたれと　惟子　好の　ちうひ　物　里

雑月なり

聞て　家　ゆうき　杉苗　ち　風　蒐

暑年のふせいを　会あ　ノ

花のうゑ　巣と　ゑ　雑子の　群ゑり　沾

いさ　ゑ　しく　峰　金　情　あ　て　上七文字　ゑ　ゑり

たう　四の　出　ちかりく　かる　ゑ　ゑ　ふ　里

○

いさ　ゑ　ゑ　川　磨る　引　ゑ　ゆ　る　嵐　ふ

里圃

冬のまさ家の　ちるもあるべく　沾圃

草枯鷹眼疾といえる風情ちらん蓋象鼠ちらく一毒章
ちらく芋髻の痕をうしな

大根のそらぬ土を蚯　ちれく　芭蕉

質物に持せり　○大根引る抜向ふ三四れと抜中の白作を
結ぶ生姜の用あり　かるる和辛和に四いれんとさら白髪を差みへし

上下ともて　朝茶のむ　秋　馬莧

ちり火ちる弁に変化に

町切の角屋の跡の　集あり　粥　沾

町の上下に跡ちせり

荷ちちくくと通る　ちる次　里

知恩院のかりは　極り　身　莧

ちちろ附の二句一章といえん

さちちの後を　楓　ちっやく　沾

真ちちの口あの素といえり

廻板の鎖に　水をかけるちちし　里

四季に花ちちの絵ちるちき料理茶屋ちちと西されと厨中をちり
てちち金弁を形さけれん去越の鎖ちち　形奥物に変あり

国刹て　家をちんちちし　こ　莧

怖箱を後河の花飾　ちけれて　沾

月きく　猫の入ちちん

まさ　ちけちんちちぬ　日の　新　里

茶の茶ちちちちみの赤の酒ちちきり　莧

白雨ハ降るなり

伊豫氣佐ふ綿とりの雨　沾

癖つきて日毎降るん仕物用の意なり　○伊豫やさふ
河内なり

うき孫ハ騨と佐れを流るる　里

托物神なり　○人商人の多く花一女ろくの風情なると
ろくきら仕るふの語なり

方明ふる時なれ門　芎

常ふなりて降るなり

業ふの業は中より佐ると出く　沙

宇治大堰のなるもいるん

柳ハ僥ゝ門をくてくわ　里

三白一画の糸摩詰ハ筆法ハ所と同法

百姓ふなりて世なるも生涯さよ　莧

五柳ふハ郷へ帰りし結と含ふるや面影かく出微ふなるも
白仕の俗称ふる称ふ

てをもあと猶ふあるめ忙　菜　沾

神用なり

賣物の湯帷子　里

商人家のもやうふ新せり

ふの暑さハをなりとも　莧

ふの人の本陰ふん

砂と這ふ蘇の中は絡線の者　沾

[illegible]の[illegible]と形容し得る物の姿情[illegible]とせり

別れと人のいひ出せは　泣　里

起情なり　○郊外の余波をみむ女のさまなるやく

巨燈の火いろて猪[illegible]とたつせ　莧

後附なり　○眞の一[illegible]なるさまも彩るき星と[illegible]なる風情なるこの後[illegible]

一石　ゆゝ　雄　力　茅　沾

實と擊碎をみるなる附なり

折〳〵ハ窓間の松[illegible]て[illegible]根　里

自他の[illegible]天[illegible]の[illegible]をたつせり

俳(ゲウ)の加減乃ちから　[illegible]さ　莧

二句一体なるなり[illegible]を嫌ふ

月影の人〳〵[illegible]を吸てゝる　沾

おもひのまゝ[illegible]て[illegible]　田

草の莚掃ちきりて悠然なる[illegible]

手拂ひ娘とやりて姫のさゝ　莧

思ひのまゝなるなり　舟用の[illegible]

糸宮の[illegible]て　仕ゝる　沾

むすびあつて友達のゝ遊び宿[illegible]更[illegible]の用を結ばれん歩越の論なり

花の宴　躑躅のゝ[illegible]　里

[illegible]方の字[illegible]の字[illegible]　○花の白を引あらん[illegible]

寺乃ひるまる山際の夕陽　蒐

苔白を賞して終日泉石草樹あるいは昔をのゝき
風色を愛せり

みちのくもさくなふなりし池の鴨　沾

を奪なり

一面ふりてあくるかぜ風　里

咲たるまくるるふるるあるの用たり

○　沾圃

猿蓑をあれるる雨の松蓑哉

已ら名の示す通ら世無一つ[illegible]なんを[illegible]れ
一[illegible]とぬるるあるや　○蓑とあるの語ら海と為てこの
物を加ケ合せ[illegible]ら[illegible]ら[illegible]を出る情趣深
あり一く深とさし一き十歳の[illegible]一

日ら[illegible]ら[illegible]れて　静なる岡　苔[illegible]

松林の地ら[illegible]を含て逍遥せる[illegible]
○[illegible]ら数の俗情ら流れ海ら[illegible]一[illegible]不作くへし
[illegible]を十論する上[illegible]ら[illegible]を[illegible]
[illegible]ら[illegible]を[illegible]と[illegible]

水かゝる池の中より乃ありて　支考

器下の[illegible]の[illegible]の[illegible]変化[illegible]ら[illegible]勿論白[illegible]の
[illegible]を[illegible]す　○乾涸[illegible]

藤井　[illegible]る山茶を[illegible]いまく　惟然

二句[illegible]の[illegible]

鶏ら[illegible]ら[illegible]て　[illegible]の月　蕉

虎ノ一所ニ変化ス

通りのちさき見もとる　秋　考

麹尚ハ秋ヨリ花ヲ咲ノ仮名遣を統く

盃ちりし一巻て恋きる鮒の魚　然

茅屋ヒとて所ゝ人あるあちこち恋きるる風あり

屋蓆のうせを見てうそ　蕉

（カ）ちきさきるもやうこんを恋ヒ人るの語ハ第ニ

変化ヒるくし

聟ゝ来て見つもせ所ニ物語　考

うゝろ所ニ久こゝくてなみてうん

中国ちりの怖カ　古古古　然

物語ハ即事物のうるとうる古古古の語ニ乃理林とあ

新月の日ちとて〳〵やら　掾　蕉

雞初の説ちゝ〳〵なる所の仮とうてそ月ニ変ヒ

うちといふ字をのくゝん変ヒ所月

一市ち　羽織ゝうせて　考

お月ちて雨ニ変ヒて

きさんしるまるふのたの　掾　然

山桜ひの毛やるちんいまきの所ニ変ヒとちゝやり

○双の四ニ破義失るやうの面影あり

山ち門ある　カ　月　蕉

白ちて作り物とせるの一除と言ん

初ちゝ〳〵畠ゝ人乃ケ　考

麻ゑて吹ろしきえん秋そふるへし

水際ひく〱濱乃小鷸　然

網もなしに遊ふさまを換骨しぬれハ其趣の論をし

見て通る紀三井ハ花の盛かり　蕉

与奪して二句一ッにおもしろきとみるへし　○見て通るの語ハ発句に用あり

葩おほひかくいとく永き日　考

こち風の又雨になりけり　然

いとくの語に無く新用の意あ

めつらしき脉を太子かゝりき　蕉

定まる境界なり風と病躰とかせれハ其趣に論を決

後條の圖像をなく居眠のかり　考

もちろん坐禅の字なる釈仁なるへし能全さあり

喧嘩のさとも　むさとせられぬ　然

大せつな日か二日ある暮れ鐘　蕉

喧嘩に通執の意あり　○能く据わりて姿先の法あり附に曲輪の立引ともつゝまし各の意あらん

雪かきわりし中のほそ道　考

門徒に霜月の法会あることあり付前句を補ふの手段を戴まへし

あら鍬の無掛ハこれ出家尻　然

○釈教のさまに転せり年をとりて空山に宗門をすゝめとし
○積の句数の詞ありくれす

奥の世なりし八　近年の作　蕉

住江のあたりを見まゝ

酒うるも看のやもき月ゑゝして　考

迫く芸地のあとのあるて酒のやもきとせ理屋うゝ

赤絵乃ゝを　庵乃　正面　然

酒屋のもやうちうゝしゝ

さゝとさゝぬ娘の心ゐ　ちりゑん　蕉

正面の二字ゝ話句を起して目のあるゝくき弾ゝゝゝ句をあゝ

夏汗のさゝるを　ゝくゝ乃　夢　考

夏の汗のあるゝを雑子のおそれゝゝゝ夏ハせゝ夏ゝ

汗のあるとゝて通ゝくしゝくハ倒裝の句法もいハん程ゝ

多籠を　ゝゝゝを　起す　松の風　然

虚實を味ゝ

大工ゝゝの奥ゝ　きゝゝ　ゆ新　蕉

大度のふゝいゝゝゝゝん

茅掘もゝゝゝて　帰る　考

普請ゝ用ありゝゝゝゝ

かゝ身て市の中を　押あゝ　蕉

仏ゝゝ除生茶のゝもゝくて　然

鴨乃油のゝゝ　ぬゝゝ　考　考

ゝゝ話をのもやうとのあるゝ　ゝゝ通ゝのゝゝゝ四歳味ゝ

○

夏の秋や 崩れて明し 冷し物　芭蕉

涼しきら雨の本情といふべし其情をあらはすに即冷しの
冷めい面会の事物を定めて冷しさらうと変じ冷しさらうと
物をに趣向しかるひんさて何くと廣莫さいひうして所詮
冷しと倒いふる清雅の風骨とうへしうの白魚の一すもあやめ菓の
あるもおそくくい同調ふるんるる崩るるとる含く冷し物の形
容ふるる蕊あつき秋の明るる風情をうるるて白接と雙関乃
俳あるとて強て祇園の詠く幽玄ふして宛ひるるる云体と
のるるる

蓮の花 撮先　曲翠

○蓮の花の咲くるるるん涼
池のるるるる冷し物と作るるるる
しき風をるるけ撮くるるを含るるやひるるる寺院祇園あり
俳花をるるるるるの白俳の撮と臣位の謙譲とるるる

蓮はいつるるの形と書といれるく　卧高

行るるの本主るるるけて寂寞る雅といふ雅の形容の撮撮よ
と云へり俳文賀の撮あり

蛙の歌 草紙と石敢 西瓜　惟然

二方の詠るるるるるるるるるる撮てい笠さ白るる
るる花るるるるの因と撮花蓋何るるるるん

月数の雲も 近るる 雲の 色　支考

みるるる月るるる冷るるる多るるる

走るるて 銭をいける 加るるる き　芭蕉

るるるる夕るるの風情るるて月所のるるあり

猪と 独場の 外へ 逃 月 みる　翠

見物るるる事るるるるんあハてるるるるるるるるゆ

ひるる 石るるを ひるて 幼次　高

甚あらぬ宮ひきるもやうるん弦引の弦ナる負性あるか

飯捲る面桶よたもむ火ち鎌　然

面桶ハト賤の行厨ろう

ぎて　ユまをしいるる　鳴海　考

釣漁の後もなるーけるん幽玄ある

あれらと寄みらまる　捲ち番　蕉

こゝ人を待らうといりんあるーるる歳まくー　○ 汁漢詩を

みあるまんハ名を望ゝ跡をかゝせるのたるひるん

お佛のうるよ夕日さし込　琴

酒屋の祝ゝ申　孤中ゆるゆるー

平畦よ菜を苅ゝたるを跡　考

秋ハ日和の風情とゝゝゝん

秋風ゝ原門の　吾風呂　然

用祝の変あり

馬引て祝ひ神る月のうけ　高

ゝ市の祝ちゝ白作おゝ

尾張てはきーもの名るる　蕉

ひゝゝよ祝ゝ承伸　自在とゆゝーー位のあゝゝ空性ゝと

ゝゝ名義ゝ南花ものゝん

鎌好のゝゝゝ花よ中あゝゝれて　翠

与奪ゝて後附の二句一章ゝ　○ ゝゝゝ 汁作の俳諧を

味ゝゝ漢泊ゝ祝の強人ゝ花ゝゝものゝあひて発ん

ゝ人よ中ゝの掛挑ゝゝれゝ甚ゝゝゝゝゝ述れゝ諧ゝ

変ゝ落ゝゝるゝ拙ゝて以ゝゝ祝ゝへー位ゝ好の

二宮の餅因て寄侯の事を述べ

正月もよし　襖もよし　さて　高

きるとて餅にて餅つきあるとて帰換骨の所うり

春風と蓑笠の法もりいつすうり　然

大工に持たせ衣の花をはせ侍るこれら風俗とうこ

教うう　村へ　ぬうる教　芝　考

泥濘知あ

喰うねめ聲も舅も口きいて　然

塞くぬさうぬの強多うこ

何その時も山伏みうる教　翠

上方〳〵かう族うん　○大峯ちうきいうう民ゆこ掃袴衣
裳かけう者まくありとそ

笠ぬとを持たけうる　猿　箱　高

蔓直うる所にて変あり

蕨こハも原　卯月　ぬくそえ　蕉

お宿と設先ようう矢本の町　考

起情うり　○茅舎家ふまれこかけ蔵り立ちうるれ乃つれを
家をふうるへ　こうるの法ふまみ眼をつけうん矢本ハ大和うり

際のひうりう　重め　乳　光ひ　然

与奪うり

呑ううをとせぬ酒の川うの　翠

茅舎の門体うん　ぬく　角うる陳の宝へ所うり

いんのうんの今を私へあり　高

淀川見るとて

封付し文なきる月の響　蕉

遊女舞子の包もて月見のもやうを打しるつや

そなへ〳〵あり〳〵て盃の上箱屏　考

よ奪なめ

鬼怒川の際の角に河原町　然

空籠をうん今も山ひろう中鶴屋より

高瀬を河ろう　表一圓　羽峯

甚町と流るゝとゝ鬼川とゝひゝ又舟の名とゝ印角名ゝ揚るの
所なれゝ二句一所なるて後なる論なり

今の月ゝ殘をゝ新くす橋のゝ　高

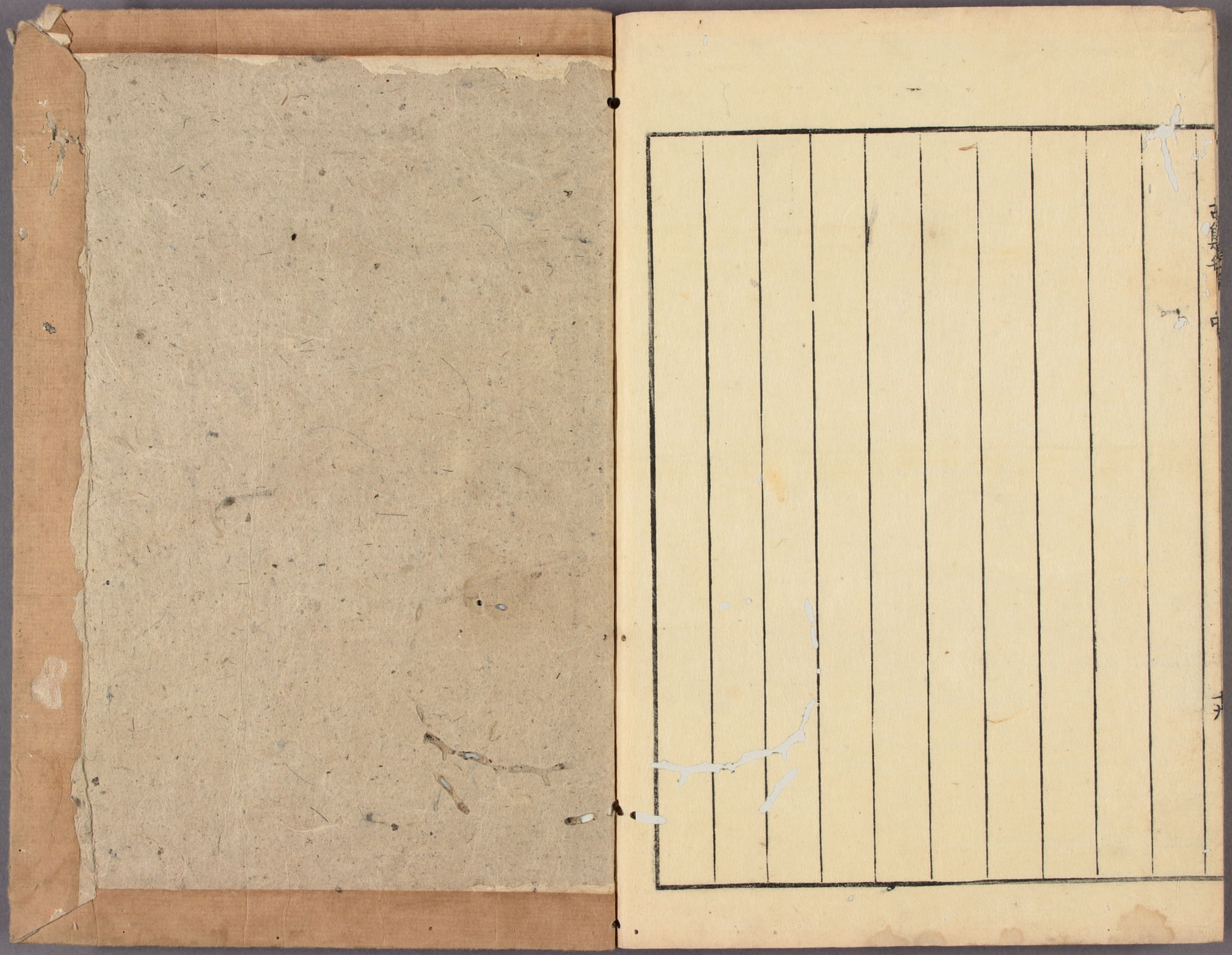
船ゝゝる月ゝ他人のおれるゝん

大キ水強カ　ぞんゝ少ゝ　然

白化の結ひとゝくゝ

寒ゝゝる山暮ゝも鶏鳴ゝ　考

御堂の山ゝゝゝゝ白作雅ゝ

腰付ゝ　後抱内下　高

いまゝ蒼のゝゝけゝき安井のゝ社靜ゝゝも仰ゝ